

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (御幸町にあった自宅と新川町の倉庫が燃え、り災した方)

大火当時、私は現在と同じ場所、御幸町に住んでおり、家族は父母と私と弟の4人で暮らしていました。

当時、私は20歳で、前年の昭和35年6月1日から函館の社会保険事務所に公務員として勤めていました。そのとき古物商を営んでいた父が怪我をしてしまい、仕事を続けることができなくなり12月31日に公務員を辞めて、昭和36年1月1日から森町に戻って父の仕事を手伝うことになりました。

大火の10月23日、午後11時30分頃は、まだ寝ていないで家に居ました。サイレンと「火事だ」という声で火事に気付き、家の外に出てみると火災は棧橋通りの方だということを家の前を通った人から聞きました。

棧橋通りの方を見てみると煙などを見たので火事だ、大変だと思いました。

当時、町立病院が今の御幸町小公園より駅側、道路の山側にありました。町立病院には私の母の姉である高齢の叔母が入院していましたので、避難させるために町立病院に行きました。2階の入院部屋を知っていたため階段を駆け上がって行ってみるともぬけの殻でした。いち早く入院患者はどこかに避難していました。このとき、町立病院の中の電気は点いていました。

付近には、消防車が来て活動をしていました。

叔母が無事であることを確認したので、その近辺を少し見ながら家に戻ってきた頃、なんとなく煙が自宅の方になびき始めていました。火の勢いが増してきているイメージでした。はじめは、駅側に煙が上がっているように見えたのですが、それからだんだん煙の向きがこちらのほうにきて、勢いを増して風も強くなってきました。

この年の春に車の免許を取得して中古の小さいトラックを購入しましたので、家に戻ってトラックに荷物を出来る限り積んで逃げようと思いました。

当時、新川町に倉庫がありましたので、そこにタンスなどの荷物を運びました。それらを、父と母、私と弟の4人でそこに降ろして、また家に戻ってきた時、炎は、かなり勢いを増し近づいてきていました。ある物をとにかく積もうとしましたが積みきれなくて、とにかく積めるだけ積んで2回目の搬送をしました。

2回目、家に車で行くときは、道路に大きな火の粉が落ち、小さな火の粉が散らばるような感じでした。当時、屋根は桎屋根が主流でした。トタンはよっぽどの家でなければ張っていませんでした。当時、自分の家も桎屋根で燃えやすく、桎屋根は古くなると、しのって隙間が開くので、その間に火が入って燃えていきました。外壁は下見板がほとんどでした。

2回目、荷物を搬送した後、もう家には戻れませんでした。新川の倉庫で待機していたとき、こちらまで火が燃え移って来る情報がありました。ここではダメだと思い1回目に降ろした荷物を2回目のトラックに積んでいた荷物の上に山積みにして、私が運転して、父と母を乗せ、弟が後ろで荷物につかまる様に乗って尾白内の駅前に親戚がいたので、その家の倉庫を目指して避難しました。尾白内に避難したのは夜中の1時か2時頃だと思います。

それっきり戻りませんでした。町は真っ赤になっていました。大火のときの思い出は、逃げ惑ったことしか記憶にありません。

24日の朝7時か8時に父をトラックに寄せ来てみると、新川町の自分の倉庫が全部燃えていま

した。その後、自分の家の方に来てみましたが、何もなく平坦でしたので迷いました。我が家はどこかなと探しました。当時、家の近くには大きな建物の森電報電話局（現在の森町社会福祉協議会「あつまーれ」）があり、その建物の煙筒が2、3本燃え残っており、付近に水をくみ上げるポンプが立っていました。我が家が建っていた場所には何もありませんでした。付近にも何もなく、不思議な景色でした。

このときの私は父を手伝っている若造でしたからこれからどうするのだろうと思いました。全て無くなりましたので、父も母もショックだったと思います。この時、私は20歳、車の免許をとってトラックがあったから逃げることができました。リヤカーもありましたが、リヤカーでは移動できる荷物は少なくなるので、トラックがあつて良かったと思いました。逃げている時は、自分以外のことを考える余裕はありませんでした。

尾白内の親戚にお世話になり続けるわけにもいかないため、12月のはじめ頃、函館から資材を用意してもらって、函館の個人的に知り合いの大工さんに依頼し、裏の家族も住めるよう間仕切りをした壁や天井の内張がない、打ちっぱなしのバラック、仮設の家を新川町の倉庫のあった場所に建てました。その後、父は1年もしないうちに新たに家を建てる思いもあり、とりあえず新川町に仮設の家を建てました。そこで1年以上生活していたと思います。

町は都市計画から区画整理を行い、御幸町小公園や川の縁に緑地帯を作るとか、道路を拡幅するとか、中間に道路を作るとか進めていきました。

この計画を進めるにあたり、各個人の所有していた土地は、道路の広さ、歩道、川の縁の幅、小公園の土地の広さ、新たに道路を作るとを勘案すると平均で3割くらい減ったと思います。

この頃の人々の気持ちは、私の父にしても、回り近所の人を見ても、前向きに頑張らなければならないという意識だったと思います。

経験者として、私が今思うことは、いつ我々の周りに危険なことが起こるかもしれない。その時、冷静に対応できるように知識をもって準備をし、みんなで耐えられるようなしつかりとした心構えをもってもらいたいと思います。

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (御幸町の自宅が燃え、り災した方)

大火当時、私は現在の自宅隣り（現在の「森社会福祉協議会あつまーれ」向い）に住んでおり、家族は父母、私と主人、子供3人、弟の8人で暮らしていました。

大火の10月23日、11時30分頃は、次の日24日が従姉妹の結婚式だったので自宅を着る物などを準備していました。

間もなくサイレンが鳴ったので、火事だと思い外に出てみると栈橋通りの人たちが逃げてきている状態でした。煙はどんどん出ていました。燃えているなど見ただけでした。

その時、風向きがこちらの方が変わって、その時、逃げる支度をしました。主人は子供3人を連れてリヤカーに洗濯機や、子供3人のカバン、当時私は、編み物を人に頼まれ作っていましたので、編み機や毛糸、出来上がった製品など、とにかく上台町の知っている家に物を置いて、またリヤカーを引いて戻ってきてと伝えました。なかなか戻って来ませんでしたので、なにをやっているのだろうと思いながら待っていると、知っている人たちが手伝いに来てくれて、布団を持って行ってくれたり、テレビ出してくれたりしていました。そこに主人が帰って来てリヤカーはと言ったら置いてきたと言ったので、どこに置いてきたか聞いたところ役場の方に行ったら、役場にも火の手が延びる感じがしたので上台町の谷沢さんというラーメン屋さんまで行って、そこに子供たちを預けリヤカーも置いてきたと言いました。リヤカーがなく、物も出せないと思っていると、火がどんどん近づいてきたので、必要なものを手に持てるだけ持って避難しました。常盤町の元「フレッシュ水車」さんは、出火元付近の牛乳屋さんと兄弟だったので馬車に畳など家にあつたものを積み、運んでくれたそうですが、その水車さんも全て焼けてしまい、皆も逃げるだけで精いっぱいだったと思います。森稻荷神社付近の表通りの人が、物を出しましたが、そこまで火が波打ってきたと言っていました。だから、逃げるだけでも大変でした。

大火が発生したときは夜だったので、炎はすごく近くに見えました。本当にすぐそこまで炎が来ているように見えました。家から逃げ出すときは、栈橋通の方向は炎で真っ赤でした。

家族の避難は私と主人が最後に逃げました。このとき靴が見当たらず、裸足のまま逃げました。10月で寒くなっていたので毛糸の靴下は履いていました。怪我はしませんでした。

父親が天理教だったので、上台町の天理教分教会に家族全員避難しました。天理教は父親の先代叔父がおり、3週間くらい天理教にお世話になりました。

朝に火災の後を見に来ました。あたり一面、焼野原で本当に何も残っていませんでした。

この辺の家は借家で、住んでいる人達が共同で井戸を使用していました。その井戸のポンプだけ立っており、それを目印に家が建っていた場所を探し、「あーこの場所だったんだ」と思いました。

それを見たときは、ただ茫然、涙も何も出ませんでした。朝、新聞にこの時の自分の写真が出ていました。

電気釜を親戚の叔父が買って来てくれました。

おにぎりは貰えました。おにぎりは、ゴマがまぶしたもので、冷たかった。なんにもつけない温かいご飯のほうが良かった。

当時、借家住まいの人たちが優先的に町の仮設住宅に住みました。借家住まいしていた人たちは特
したよねと言われていました。

借家でない人たちは、自分で家を建てなければなりませんでした。当時の町民は大変でした。住宅
資金も10万円借りることができました。当時の10万円は大金でした。貸す人も借りる人も大変で
した。

私たちは火災の後、家を建てるため大工さん探しや材木を買うため奔走し、避難して3週間後くら
いでバラックの家を建てました。当時、建築の規制があって直ぐ壊すことができるように15坪くら
いで平屋建ての家しか建てることができませんでした。

父は読み書きは出来ましたが、耳が聞こえない人でしたので、夫が世帯構成資金を借り、それに足
し増して隣に家を建てました。基礎のない仮設住宅のままの家で、その後、区画整理が始まり、そ
の時、建てた家を丸太に載せゴロゴロと現在の場所に移動させました。

今、私が住んでいるこの家は基礎が入っていますが、隣の家は大火後から建て直しはしていない
ため基礎が無い状態となっています。基礎を入れるとなると家を壊さなければ作ることには出来な
いので、何回も改築して今に至っています。

大火後、家はどんどん建ちました。家は住めれば良いとベニヤ板張りのバラックでしたが、復興は
早かったと思います。

大火の時、上台町の方々が避難の手伝いを行ってくれました。当時は人のつながりが強かったと思
います。私が小学生のとき、付近で火事があったのですが、焼けた家の人に、「浦島」（現在の「フォ
ーレスト」付近）という料亭の女将さんがおにぎりを持って来てくれたり、付近に住む方々が食べ物
を持って来てくれたりしました。困っている人に対し助け合いの気持ちがありました。

私は、人への声掛けが一番大事じゃないかなと思います。大変なときに「大丈夫だから。がんばれば
なんとかなるよ。」と励まされ、本当に頑張らなきゃと思いました。当時避難したとき、おにぎりは
冷たかったけど、本当にありがたかった。こういう人と人のつながり、助け合いを大切にしていって
ほしいと思います。

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (修学旅行で不在、家族が経営していた会社建物が災した方)

森町大火当時、私は尾白内町東部に自宅がありました。

大火の発生した10月23日は、修学旅行先の京都に居ました。22日に森町を出発し、京都に23日に到着しました。

たまたま、自分はトランジスタラジオを持っており、朝起きて、ラジオをかけたらニュースで北海道の森町が大火だと放送されました。ラジオの放送は、24日の朝6時頃、旅館で聞いたニュースだったと思います。このとき私の周りには、誰か居たはずです。それを聞いて先生に教えました。

その後、先生が地図を描いて、今ここまで燃えていると伝えて、それを聞いた女の子達は「自分の家が燃えている」とか言って泣いていました。かわいそうでした。

修学旅行中、大火を聞いて、すぐ帰ることも考えていましたけど、帰っても住む家が無くなっている人もいることから先生たちも話をして、旅行は続けることとなりました。

私の自宅は尾白内町でしたから燃えませんでしたけど、兄達が経営していた店が焼けました。当時の大島の店は、今の御幸町にあるパン屋（現在の「チロルの森」）の場所にあり、自転車、バイクを取り扱っており、忙しかった。消防は今の御幸町ラルズマートと岩渕美容院の間にあり、大火後、建設された消防庁舎の場所（現在の「森社会福祉協議会あつまーれ」）に森電報電話局がありました。森町には、映画館が2つあり、大島の店の裏（現在の「高橋鮮魚店」付近）に1つあり、それも焼けてしまいました。

修学旅行の帰り汽車は東森廻りで森駅に来ました。森の街が近づいてくると、がらんと何もない街が見えてきました。新川町あたりから焼けた街が全部見えました。

近くで見たとき「ワー」と愕然として、これからどうしていくんだろうと思いました。

店が燃えたことは聞いていました。大火後、その場所には何も残ってなく、あったのは井戸のポンプだけでした。何も無くなっていました。本当にきれいに無くなっていました。

大火の時、兄たちが、今の郵便局のもう少し上に警察署があり、その裏に、ある程度の物を運ぶことはできましたが、森電報電話局から電報配達などに使用していた修理で預かっていたバイクなどが焼けてしまい弁償したりしました。

森駅には、迎えに来た同級生の家族が居たと思います。泣いている女の子もいました。住んでいる家や建物が燃えてなくなった同級生はかわいそうでした。私の場合、店は焼けましたけど、尾白内の家があったから、まだ良かったほうです。

復興に、皆周りも一生懸命でした。復興までは速かった。そんなに期間はかからず商売をやりはじめました。食べ物屋さんで一番早く商売をはじめたのは、「赤のれん」だったと思います。

親と兄達は死にもの狂いでがんばっていたと思います。大島の店が焼けた後、落部の銀婚湯付近にお客さんがいて、そのお客さんから牛舎として使用していた建物を購入して森まで引っ張ってきて、当時店があった道路を挟んだ向い、大海さんの建物があった場所（現在の「ドルマン」の郵便局側）に建物を置き、商売をはじめました。

人口も2万人くらいいたと思います。

私たち高校生は、大火前と同じように元気でした。

道路も区画されて、どんどん家も建っていき、町もきれいになっていきました。

当時みんな悲しかったです。大火になることがないように願っています。火事にならないように気を付けていてもらいたい。

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (出火建物付近に家族が経営していた会社建物があつた方)

大火当時、私は上台町に住んでおり、10月23日、私は高校生で修学旅行に行っていました。

修学旅行には、お弁当を2、3食分持って行かなければなりませんでした。

出発は朝早かったので、母親は前日からお弁当を作って、いろいろな食材を使って、ご馳走をがんばって沢山作ってくれていました。朝、母から「変なんだよね、朝起きて弁当箱に詰めようと思ったら、作ったものがほとんど無くなっているんだよね。ネズミなんて出たことないのにネズミが出たみたい。」と言われました。しかたがないので、母はあるものを詰めて持たせてくれました。周りの方々、隣近所の方々も「ネズミが出てきている」と言っていました。その後、大火になったので、ネズミは危険を察知して上台町の方に大移動したと皆さん言っていました。無くなったのは、私はネズミだと思います。

10月22日の夜明けに森駅に集合、出発して、寒かったことを覚えています。汽車、連絡船に乗って青森を普通車急行で日本海廻りで車中1泊して、23日の夕方、京都に到着しホテルで宿泊しました。

大部屋に何人も寝ていました。24日、朝早くワイワイ騒がしかったので起きて聞いてみると、「なんか森町大火だつて。」男子が騒いでいると聞きました。私たちは、最初冗談だと思っていましたが、どうやら本当らしいとなって、「えー」となって、先生たちを起こしに行かなければならない先生に伝えに行きました。先生たちは集まって話し合いをして、大火であることは事実なので団長の先生がみんなを集合させ、これからどうするか話し合いがありました。

このとき皆は「帰る。」「こんな大変なときに修学旅行で楽しんでられない。」「誰の家が焼けたんだ。」「どうなってんだ。」「出火元は」、家が焼けた人たちからは「帰ったところで住む家が無いぞ。」という声がでました。

そのような中、京都のホテルで朝食を食べ、帰るという話も出ましたが、その日の1日の行動は予定通り行いました。だけど、皆泣いて、どこに行っているものかわからない状態でした。鹿部や落部、駒ヶ岳、赤井川などから通学していた人もいましたが大半は森町の人だから、とりあえず「お小遣いは使わない、無駄遣いはしません。」と生徒みんなで協定を結びました。本当に皆お金を使いませんでした。皆が泣きながら行く先々でカメラマンがいて「修学旅行で大変ですが皆がんばって下さい。」と言われて写真を撮られました。

次の日か、またその次の日か森高校から先生が来ました。「修学旅行は続行しなさいという指示を受けてきました。」の伝言と焼けた家について教えてくれました。

私の母から私宛に24日の夜、宿泊していた旅館に電報が届きました。親が所有の建物は出火場所から近い場所にありました。電報には「建物は大丈夫だから、安心して楽しんで旅行して帰っておいで。」という内容でした。だけど、建物は出火場所からすぐの場所なのに母は私を悲しませないために嘘をついてわざわざ電報を出してくれて、なんてすごい人なんだろうと思い感動しました。職業安定所（現在の「焼肉樂園」）を境に燃えてなかったため、親所有の建物は燃えませんでした。

修学旅行が終わり汽車に乗って森町に近づいていくと、車窓から燃えたところは見えませんでした。が、きな臭い匂いがしました。それから何もない焼野原の街が見えてきて、みんな棒立ちで、これが現実なんだと、男子も女子も声を出して泣いていました。

私はこれから森の街はどうなって行くのだろうと思いました。私たちの将来、どうなって行くんだろうと一瞬思いました。これで将来の進路を変更する人もいるだろうなと思いました。

駅に着くと、母が迎えに来てくれていて、母が「本当に大丈夫だからね。」と言われ、帰り現場を見て家に帰りました。駅から帰る途中、母から「家にお父さんの友人が来て、しばらく家に居るからね。」と伝えられました。

家に帰ると父の知人、家族6名が家に居ました。知人の家は燃えてなくなっており、冬も近づいていたし、大工さんも直ぐに手配できない状況でした。父と同じ業種で仲良くしており、春まで家に居たと思います。

家の近所に暮らしていた学校の先生が、自分が住んでいた家を森川町に住んでいた知人の家族に提供して、その先生が私の家の2階3畳間に住んでいました。

私の家には3家族居ました。

このときは、みんな助け合っていたと思います。

森町に帰って来てからは授業ができる状態では無く、高校の授業再開は1週間から10日してからだったと思います。それまで支援物資の仕分けを手伝いました。

支援物資が森小学校の体育館に山のようにどんどん積み込まれ、私たちはその支援物資の仕分けを何日も手伝いました。マスクをして、本当に作業は大変でした。全部箱から出し、きれいな衣類を送ってくれた人もいました、洗濯をして、アイロンをかけて、たたんでくれた人もいましたが、古着もありました。なにこれと思うものもあり泣きたかったこともありました。大人物、子供物、男子物、女子物と全部仕分けをし、それを何日も手伝いました。このときは、誰かやらなければならない思いながら、だけど今思うと悲しかったです。

私たち高校生は授業が始まってから、大火前と同じように普通の生活に戻りました。

このとき大人たちは団結して復興に向け、朝早くから夜遅くまで仕事して必死だったことをひしひしと感じました。森小学校の近くで避難している人たちのために大人たちは御飯焚きを毎日していました。

大火当時の「助け合い、思いやりの精神」、だけど今の私にはきついかもしれない。本当に近しく、親しい人だったら2階どうぞ使って下さいって1家族くらいは受け入れることは出来ると思う。

私を含め皆、いつどうなるかわからないから。

だけど、ご飯を作るとかはきついと思う。

タバコのポイ捨ては絶対やめてほしい。

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (出火建物付近に家があり、避難した方)

大火当時、私は現在の隣りに住んでいました。

家族は父母、祖父母、姉、自分、妹、弟、妹の9人で暮らしていました。私はこの時小学校6年生でした。

当時も親は自転車店を営んでいました。

店の並びの角で現在は空地（現在の「焼肉楽園」付近）になっていますが、そこに職業安定所があり、大火の日、10月23日の日中に職業安定所を出火建物とした消防の訓練がありました。

当時、魚屋さんをやっていた息子さんが勉強を教えていて、今の学習塾のようなものをやっており、私の姉がそこで勉強を教わっていました。その日、勉強を教えてもらっていた人達に私も付いて行き、一緒に映画館（現在の「高橋鮮魚店」付近）に映画を見に行きました。帰って来たのが夜の9時か10時くらいだったと思います。その後、寝ました。父母は1階に寝ており、私たち兄弟は2階に寝ていました。

夜12時頃、金山通りの上でせんべい屋さんを営んでいた人が、私の家の戸を叩き、「あれが見えないのか、あれが見えないのか」という声で叩き起こされ、外に出て初めて火事であることがわかりました。

その時、既に私の家の直ぐ傍にあった、元井上写真館（当時の職業安定所海側）があった家とその隣の家が燃えていました。

私たちはとりあえず、タヌキ山（「森稲荷神社」の横）に避難し、父と母はリヤカーで家の荷物を運びました。

現在の「花笛」のところがマーケットで、マーケットの奥に畑沢という菓子店があって、そっちにも火が延びていき、そして現在の「よしのや」がある場所も燃え、元井上写真館のあった場所に火が延びていきました。

私たちが起こされたときには、風向きが新川町方向に変わっていたと思います。

角にあった職業安定所（現在の「焼肉楽園」付近）、現在の「華京」のあたりは燃えませんでした。

この一角で燃えたのは現在の「海の幸」のあたりにあった、吉田牛乳屋さんと当時「浦島」（現在の「フォーレスト」付近）という料理店があり燃えてしまいました。

そこから新川、常盤、森川町方向に燃えていきました。その時の火災の炎は、大きく激しかった記憶があります。

消防車は来ていましたが、どのような活動をしていたか、あまり記憶がありません。

次の日の朝方、函館市から消防車がサイレンを鳴らして来た記憶があります。

当時、常盤町にマルハチ水産（現在の「北電森変電所」と「常盤橋」の間）という蒲鉾屋さんがあって、そのドラム缶がボンボンと爆発した音を聞いた記憶があります。

火災がおさまった知らせはなく、朝早く何時か記憶はありませんが水車の方まで歩いて、どこまで燃えているか見にいった記憶があります。

その時は、至るところで火は燦燦と燃えており、鎮火のしようがない状態でした。

24日の夕方に、家に家族全員帰宅しました。家族親戚は家が燃えなくて良かったと言っていました。

小学校は避難場所になっており、かなりの人数が結構な期間、体育館に避難していました。体育館には、救援物資が山のように積まれ、炊き出しなども行われていました。

復興に向け、住民は即動き出さなければなりませんでした。

役場で都市計画による区画整理や道路整備を進めて行こうとしましたが、道路を整備することで建物や土地がなくなるため、反対し道路が整備できないこともありました。

周りの大人たちは一生懸命でした。とにかくバラックでも何でもいいから、建物を建てなければ商売が出来ないので、寝る場所と、商売する場所を確保していきました。

あっという間に、建物が建った記憶があります。

当時を振り返ってみると、もし、戸を叩き火事であることを知らせず、風向きが変わらなかったら、おそらく自分たちは全員死んでいたと思います。

また、自分が店を不在だったとき、隣の焼肉屋が火事になり、火事を知って店に帰ると付近の人たちが、店の自転車を全部安全な場所に移動してくれていたことがありました。皆助けてくれました。

災害はいつ来るかわからないので、その時の備えと、助け合いの精神をもっていてもらいたいと思います。

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (大火の消火活動に従事した元消防団員)

当時、私は親と一緒に漁業を営んでおり、家は詰所の直ぐ傍にありました。

この時の尾白内消防団は、兵隊経験者の藤田さんが分団長で、川村さんもおりました。

当時、森町の一般の家の外壁は下見板で穴も開いており、内壁も無く外が見え、屋根は殆どが桎屋根でした。少し景気の良い親方衆の家はトタン屋根でした。尾白内では屋根板が飛ばないように、屋根板を止める鉄釘を保護するため、屋根に油を塗っていた家もありました。今考えると、そのような家でよく生活ができたなと思います。

昭和36年10月23日、11時30分頃、私は家に居ました。この時の火災は、尾白内消防団のポンプ車のサイレンで火災を知りました。詰所に行き、集合した団員数人でポンプ車に乗り出動しました。出動した団員の人数は記憶にありません。

大火の活動については、次の朝、夜が明けるまで消火活動を行い、とにかく大変で疲れた記憶があります。着ているものは、何回も濡れ、着替えたのを覚えています。

当時の消防ポンプ車は、今のポンプ車と比べると、かなり性能は低いものでした。

最初にポンプ部署した場所は棧橋通りだったと思います。この時、火はまだ、新川町方向に延びていませんでした。

街並みに合わせるように、風向が悪く、北西の風が吹き、風速も強くなっていました。

当時の水利は、今のよう防火水槽や消火栓も無く、側溝を流れる水を食い止め、そこに溜まった水を使って消火していました。

手の施しようがなく、次から次へと延焼していきました。

当時、消防本部も今のラルズマートの横にありました。

いかめしの阿部商店は助かりましたが、その下（海側）はずっと延焼していき、今の森川町北電森変電所があるところまで延焼しました。

尾白内消防団の活動は、どこ何を使って、どのようにホースを延ばしたか、今は記憶がなくなっていました。活動場所は何回も変えて活動した記憶はあります。

函館など、他の地域から応援に来ていました。

活動を終え、次の日の何時に家に帰ったかは記憶にありません。

火災の後を見ましたが焼けて何も無くなっており、大火とはこのようになってしまったのかと思いました。

大火後の復興は、早かったような記憶があります。

大火後、消防のことを悪く言う人がいたかどうかは記憶にはありません。

大火後、火災現場で「いいぞ、いいぞ」と言われても何がいいのか分からないことがありました。「放水はじめ」、「放水やめ」などの伝達など、訓練の必要性を感じました。

当時を振り返り、今思うことは、今は大きな火災や災害は無いが、いつ災害は起こるかわからない。集まって災害を想定した訓練をしていないと、火災現場に行って、誰が何をするのもわからず、伝達もできない。皆が協力することができない。とにかく訓練を継続していつてほしいのが私の願いです。

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (消火活動時従事した消防団員)

当時、私の家（現在の「森町消防団第4分団詰所」付近）は、今の場所より国道5号線側にありました。当時の住所は富士見町の無番地だったと思います。今の場所には昭和42年に移ってきました。

今の私の家の場所（現在の「森町消防団第4分団詰所」付近）には当時、種田商店があり、大きな建物でした。昔、海岸通りは、大きな親方がいて、凄く景気が良く、家が沢山建っていました。

この当時、海岸通りは湯の崎からトンネルの下をかかって町に抜ける国道でした。

確か昭和39年か40年に国道（現在の国道5号線）が上に開通しました。

森町大火の時も、今と同じ場所に第4分団の詰所がありました。

終戦前、鷲ノ木に警防団というのがあって、終戦後、消防団に変わりました。

今の詰所のある場所に町有地があったので、第4分団詰所を建てることとなりました。当時、町にお金もなかったのも、町の財産として山があったので、落葉の木を団員皆で切り、持って来て乾かし、製材に出して材料を作ってもらい、車庫付の詰所を自分達団員で建てました。

私は何年か記憶にないが、警防団から消防に入っていました。

この時の消防ポンプは腕用ポンプでしたが、ここに詰所が移るときに、これでは時代遅れだから町がその当時、いすゞのエンジンにポンプを接続し、車輪を4輪付け、引いて移動できるようにしたポンプを第4分団に配置しました。他の消防分団は持って歩ける小型ポンプを使っていました。

昭和36年10月23日、11時30分頃の夜中、私は家に居ました。自分は漁業を営んでおり、他の団員もほとんど地元で働いている人ばかりでした。何かあれば直ぐに集まれる状態でした。私は、大火当時、班長だったと思います。

火災を知ったのは定かではありませんが、鷲ノ木の部落にも消防団員がおり、浜に住んでいた人が小便をするため起きたところ、町が火事だということを知り、詰所の横に自分たちが落葉の木で造った櫓から半鐘を鳴らして皆に知らせました。

それからが問題でした。ポンプとエンジンを積載した車を、団員で引いて火災現場に行かなければなりません。エンジンは大きく船と同じくらいのエンジンで非常に大きく重いものでした。大きいエンジンのポンプでしたので、ポンプの性能は森町で一番の揚放水能力がありました。このポンプを10人くらいの団員で一生懸命、引いて運びましたが、鳥崎町あたりで皆舌を出して疲れていました。なんとか現場につきましたが、いくら若くても身体にはこたえていました。今考えるとよくやったと思います。このような、ポンプなので、ポンプ部署する位置は移動が大変だったので、風下に部署するなという幹部の考えでいました。大火以外の火災出動で尾白内の火災に行った時は、団員で馬を持っていた人もいましたので、その人から馬を借りて、馬に引かせて尾白内の火事現場に行った記憶もあります。

消火活動するにも、刺子に水をかぶって、火の中に入って行って人を助けたりしました。火事現場に行ったら眉毛や睫毛、髪の毛が焼けてなくなることは珍しいことではありませんでした。桂川のあたりに、ダイボの番屋があり火事になりました。浜に降りるところに行かなければ水がありませんでした。しょうがないので出し風（海に向かって吹く風）でしたが、「とにかく皆、自分とポンプに水をかぶれ。」と言って、火の中をくぐり、浜にポンプを到着させ、海から水を吸い上げ番屋に水をかけ消火したという経験もしたことがあります。この時も皆、被り物から出た毛が焼けて無くなっていました。

大火の時、かなり強い北西の風が吹いていて、第4分団は今のフォーレストあたりに「浦島」という総2階建ての大きな料理店があり、「浦島」を守るため、その少し手前にポンプ部署しました。

その時、ある程度まで火災は広がっていました。

ホースを延ばし終わった頃、「浦島」の料理屋に火が入りました。建物が崩壊するまで5分しなかったと思います。その屋根に火がつき、その屋根が飛び、昔、松浦商店があったあたりに落ちました。その光景は衝撃でした。火の粉も飛んでいましたが、火のついた障子だとかも飛んでいました。

昔、木造の家だったので、すぐに燃えていきました。

大火は次々延びて広がった火災ではなく、火が飛んで、あちこちから燃えて、そこから更に広がっていった火災でした。

この火災現場を見に来た新川町の人たちが家に帰ってみると自分の家が無いと言っていました。

このような火災で延焼速度が速すぎたので、消防はポンプをもって逃げるしかなく大変でした。

私たち第4分団も最初に伸ばしたホース4本を撤収することができず、そのまま置いて移動しました。火を消すところの話ではなかった。鎮火後、見に行ったらホースは焼けて無くなっていました。

このとき、消すための水が無く、火は飛んで行き、街の中に消防も居られない状況だったので、大通りより上（森稲荷神社や郵便局側）、森川を境に新川町、森川町側に延焼をさせない防ぎょに切換えました。

私たち第4分団は、大通りに出て元森小学校（現在の森町活性化広場）の坂の下のいかめし阿部商店付近にポンプを移動させ、ポンプに力があったことから、2分団の団員達に森川までホースを延長させ、当時は、消火栓などの水利が無かったので、他の分団が森川から水を第4分団のポンプに送り、大通りから上（森稲荷神社や郵便局側）に延焼させない防ぎょを行いました。第4分団は、その後、水もなく、ホースも無かったので、ポンプを移動することは出来なく、ポンプの両サイドからホースを2線出し、ホースが届く範囲で、夜が明けるまで団員が交代しながら防ぎょ活動に専念していました。このとき、4分団の団員は20人くらいで活動していました。

砂原や大野、函館、七飯などのポンプ車が応援に来てくれました。みんな森川から水を給水し、それで延焼は治まりました。当時一妙寺（現在のパチンコジャック駐車場付近）が新川町にあり、一妙寺は燃えましたが、そこに応援に来てくれたポンプ車が放水してくれました。応援に来てくれた各地の消防が更に広がらないように活動してくれたので、延焼を食い止めることができました。

活動が終わったのは夜明けでした。夜が明けて火災現場を見ると焼け野原となっていました。残っていたのが水を汲み上げるポンプで金属でできているので、これがあちこちにポツン、ポツンと残っただけでした。その光景が記憶にあります。木の影は全く無く、金物だけが残っていました。その中で建物では拓殖銀行（現在の「丸協石油株式会社」の森駅側）のコンクリート建物と、阿部の味噌蔵だけが少し残っただけで、あとは大通りより下（海側）の通りは全部燃えて無くなっていました。

これを見たときは、疲れて倒れる寸前で、何も感じることはありませんでした。函館や砂原などの応援で火が止まったという報告を受けて腰が抜けたようにヘタヘタとなるくらい疲れていました。そのようにしている時、婦人部の人たちが朝飯のおにぎりを届けてきてくれて、それを食べました。それからの焼け跡は、片付けるも何もありませんでした。時間をかけて皆でポンプを引き、坂を上っていくのが辛くて2回くらい休んで朝、詰所に到着しました。皆疲れていました。水をかぶっては、火係をするの繰り返しで皆の姿は灰汁なのか灰なのか水なのか分からないくらい人相はありませんでした。

消防本部も焼けて無くなったため、一時役場の近くに仮の庁舎を建て入っていました。

大火前は、森町ではイワシが取れ、人口も2万人くらいいました。

大火から森町の復興は早かったように記憶しています。当時、新聞などでも復興が著しいという記事が目についていました。当時はそんなに景気は良くなかったはずですが、森町の人たちは皆、お金を持っていたのか、経済の復興が早かったように感じていました。2、3年のうちに焼け跡に建物が建っていきました。消防庁舎が建った年（昭和37年）には、周囲に建物が結構建っていました。

漁師街だから漁師根性は思ったら後先考えず、建てたら何とかなるさと行動に移す人が多くいましたので活気があったと思います。落ち込んでいるわけではなく、前向きに考える人が多かったと思います。

今、私が思うことは、今の建物の煙が重大になってきているのがこれからの消防の課題になってくるのではないか、家だったらその煙を吸わない予防、燃えたら逃げることを徹底して町民に教えとか、煙を吸った人間まで助けるというのは出来ないと思う。火が出たときの通報の速さが求められてくるのではないか、覚知をいかに早くするか、逃げることをいかに早くするかが課題だと思います。

森町大火から60年を迎え 森町大火経験者へのインタビュー (付近まで延焼、難を逃れた三吉神社宮司さん)

森三吉神社は、昭和56年に新築され現在に至っていますが、大火当時、家族は、旧神社（昭和17年建設、戦時中のために仮の造り）の社務所に住んでいました。

昭和36年10月23日の大火当日、私は新川町の知人宅へ泊りがけで行っていました。

寝入った深夜、サイレンがけたたましく鳴り、起きてみると空が真っ赤に染まっていて、これはただ事でないと言うことで、家に帰ったのが夜中12時頃だったと記憶しています。

その時の事を、現の坂本総代長が掛潤（現在の「砂原西」）の自宅からも、すぐそこで燃えているように鮮明に見えたと言っています。

先代の父は、私が8歳のときに亡くなっており、我が家は、母と妹の3人家族。火は猛烈な勢いで近づいてきましたが避難せず家に居ました。心細く、ただただ恐怖感に襲われていたのを思い出します。

あの頃、冬支度でどこの家も暖房用の薪を家の周りに積んでいたのが余計に燃え広がったのだろうと思います。

当時の住宅のほとんどが木造で、外壁は下見板造り、屋根はトタンのほか桎屋根も多く、砂の付いたフェルトの防水紙にコールタールを塗っている家もありました。木造だから火の勢いは早く、火災は強風であつという間に前門通りに延焼し、現在のマルミ吉田商店近くまで迫り、火はいよいよ神社の目の前に押し寄せてきました。多くの方々がリヤカーで家財を持ち出すなど避難する人々を目のあたりにしました。

神社側道向かいに綿工場、周辺に住宅や長屋が密集しており、そのほとんどの建物が焼失。風が増し、火の粉が飛ぶ。常盤町、水車の方へ飛火。常盤橋近くのマルハチ蒲鉾工場（現在の「北電森変電所」と「常盤橋」の間）で、油の入ったドラム缶が破裂した爆発音はすさまじいものでした。

朝になって鎮火したものの、くすぶる周辺は焼け野原。当時10歳の私は只々喪失感にさいなまれたものです。

我が家で避難しなかったのは、何としても神社を守らなければ、場合によっては御神体を持ち出さなければの一心であつたと、後年、母に聞きました。

隣家が燃え、神社の目前まで火が迫りましたが、直前で勢いが止まり火難を除けたのは、境内に柳の木やオノコノ木があり、防火の一助になってくれたのでしょう。そのため、神様が守護ってくれたと、多くの方々から「火防の社」と言われてきました。

住む家をなくしたり災した方々は、さぞや茫然自失のことだったか。すぐさま森小学校の体育館が避難所となり、当神社にも近所であり災した方々の数家族が泊まり込んだものです。全国からの復興支援にどれほど勇気づけられたことか。

空が真っ赤に染まり、この世のものとは思えない光景でした。火災の恐ろしさは今でも忘れることはできません。

60年前に森町で大火があつた事に思いをはせ、より一層、防火意識を高めていかなければとの思いで、森町大火から今年で60年を機に、境内に大火の歴史を伝える移動式看板を設置しました。

「災いは忘れた頃にやってくる」町に深刻な爪痕を残した大火の事を、次の世代に伝えていかなければと、思いを新たにしています。